

〈研究ノート〉

釈奠に関する覚書

後藤忠盛

一 延喜式にみる釈奠

江戸時代藩校を中心に行われた釈奠は、延喜式に見られる釈奠の方法をもとにして行われた。延喜式に見られる釈奠の概要を記すと次のとおりである。

- (1) 祭神 先聖文宣王(孔子)を主神に、顔子・閔子騫・冉伯牛・仲弓・冉有・季路・宰我・子貢・子游・子夏のいわゆる孔門十哲を従祀した。

(2) 役職

三献(三人) 奠幣のことをつかさどる。いわゆる初献官・亜献官・終献官

謁者(三人) 献官を導くことをつかさどる。

大祝(二人) 弊を授けたり祭文を読んだり、あるいは、福胙を賜うことをつかさどる。

唐司(一人) 唐戸の開閉や聖賢堂の安置、唐室の設営をつかさどる。

郊社令（三人）神座を設営したり、樽幣拈爵を用意する。

奉礼郎（二人） 席の庭の設営や儀式事をつかさどる。

賛者（二人） 賛唱のことをつかさどる。

賛引（五人） 案内役をつかさどる。

協律郎（二人） 楽の指揮をつかさどる。

斎郎（五十人） 俎や豆のそなえごとをつかさどる。

館官（一人）・学官（一人）・弾正忠（一人）・疏（一人） 饌具の準備や掃除・瘞弊の点検などを行なう。

大蔵省（二人） 席や堂院の設営あるいは饌具・幕などの準備をする。

掃除寮（二人） 席室ならびに享官室の設営をする。

大膳職（二人） 饌具の準備をつかさどる。

木工寮（二人）・工（四人） 饌具の棚を作るなどする。

大炊寮（二人） 明かり火をとりかまどのことをつかさどる。

主殿寮（二人） 堂上の掃除や焼香・燈燭・庭燎のことをつかさどる。

造酒司（二人） 清酒や醴齊等三事の酒の準備をする。

主水司（二人） 明水（神に供える水）のことをつかさどる。

雅楽寮（二人）・工人（二十人） 奏楽のことをする。

左右京兵士（各四人） 席門の警護にあたる。

この祭礼に関する役職者百十六人の多きを数えた。いかに大切な祭礼であつたかを伺うことができる。

(3) 釈奠の順序

奠幣 神前に弊帛を奠ずる行為であり、まず、先聖文宣王に供えられ、つづいて、先師首座の顔子に供えられた。

進饌 邊豆蓋蓋を神前のそれぞれの位置に供える。

初献 醴齊を先聖文宣王の神前にそなえる。このあと祝文を読みあげる。祝文は次の通り。

維某年歲次月朔日子、天子謹遣天学頭位姓名、敢昭告于先聖文宣王、惟王、固天攸縱、誕降生知、經緯礼樂、闡揚文教、餘烈遺風、千載是仰、俾慈末学、依仁遊芸、謹以制弊犧齊、粢盛庶品、祇奉旧章、式陳明薦、以先師顔子等配、尚饗

また、先師首座にも醴齊が供えられ、先師従祀に対して祝文が読まれた。

飲酒受胙 大学頭は、鬯樽の酒をいただき口にふくむ。また、同様に胙をいただく。

巫献 盞齋を神前にそなえる。これは、初献の場合と同様である。

終献 巫献と同じように盞齋を神前にそなえる。

徹供 供えものを下げる。

飲福受胙 役職者や学生が福酒をうけ、また、胙をいただく。

徹弊 そなえられた弊帛をさげ、瘞埴に埋める。

賛祝 祝板を齊所においてやく。

講論 釈奠の儀が終つたあと講義がおこなわれ、また、議論もなされた。

二 諸藩における釈奠

(1) 祭神

江戸時代各藩に藩校が出来るにおよんで、多くの藩で釈奠（釈菜）の式がおこなわれた。祭神は文宣王を中心に、顔子・程伯惇・張子厚・朱元晦・周茂叔・程正叔・邵堯夫・曾子・子思・孟子等であった。藩によっては文宣王のみ、あるいは、文宣王と顔子の二神を祝る藩もありそれぞれであった。儒式のこの祭礼に、東照宮、吉備真備、菅原道真を祀るところもあり注目される。

孔子やその弟子達は「能育三千之英才、能啓万世之太平」、また、「徳配天地、道冠古今、六経垂訓、万世仰化」あるいは、「経緯礼菜、闡揚文教、徳被海隅、千載是仰」として、あがめられたのである。

『日本教育史資料』にもとづき、釈奠の際の祭神を列挙すると次表の通りである。

祭神	藩名	昌平	豊平	山口	徳山	豊浦	名古屋	佐倉	出石	鳥取	和歌山	挙母	庄内	弘前	宮津	津和野	多久	鹿児島	琉球
文宣王	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
顔子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
程伯惇	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
張子厚	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
朱元晦	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
周茂叔	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

祭神	藩名	昌平	豊平	山口	徳山	豊浦	名古屋	佐倉	出石	鳥取	和歌山	挙母	庄内	弘前	宮津	津和野	多久	鹿児島	琉球
程正叔	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
邵堯夫	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
曾子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
子思	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
孟子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
周元	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

津藩 文宣王・吉備真備・菅原道真を祀る。

足利藩 文宣王・東照宮・野参議（小野篁）を祀る。

富山藩 文宣王・孔子七十子・吉備真備・物茂を祀る。

佐倉藩 表中の他、関子騫・冉伯牛・仲弓・冉有・季路・宰我・子貢・子游・子夏を祀る。

館林藩・豊橋藩・平藩・秋田藩・勝山藩・加賀藩・篠山藩・豊岡藩・赤穂藩・龍野藩・久留米藩は文宣王のみを祭神とする。

(2) 釈奠の順序 昌平饗における釈奠は、奠幣・進饌・初献（含読祝文・飲酒受胙）・亜献・終献・徹供・飲酒受胙・徹幣・焚祝の順序におこなわれた。これは延喜式に見られる釈奠の次第と全く同じである。

諸藩における釈奠の順序は、基本的には延喜式や昌平饗の式典にならないながら、細かな所においては、若干の相違点が見られる。

山口藩(毛利本藩)の場合、まず、迎神の儀式からはじまり、奠幣・進饌・初献(含読祝文)・巫献・終献・受胙
 徹供・講釈・望瘞・送神とおこなわれた。但し、「受胙」は藩主が留守の時には省略された。初献の際に読まれる祝
 文は、多くの藩で式の終りに焼かれるが、山口藩の場合、これについての記載はない。津藩の場合も昌平饗や山口藩
 とよく似た式典の流れではあるが、三者の比較の為、その次第を記すと次の通りである。すなわち、捲簾・迎神・奠
 幣・進饌・初献(含読祝文)・巫献・終献・徹供・送神・徹幣・焚祝・飲福・受胙の順である。

延喜式にある祭奠の順序を基本とするならば、この基本にほぼ似た方法がとられた藩は、上記三藩のほか、土浦藩
 平藩・秋田藩・富山藩・出石藩・久留米藩を挙げることができる。

特色の見られる藩の祭奠の進め方を列挙すると次の通りである。

名古屋藩は捲簾・献餅・献酒魚・奠幣・読祭文・徹祭文・徹幣物・徹魚・徹餅・講釈・下簾の順に行なわれた。初献
 巫献・終献の作法は行なわれていない。献酒魚が初献にかわるものと思われる。また、祭文が読まれたあと、すぐに
 徹せられるのも大きな特色といえよう。

広島藩の場合は、褰帳・進饌・献酒・読祝文・飲酒・徹饌・垂帳・徹祝文・焚祝と献酒が一度だけで、祭奠の儀式
 を簡略化している。これにいた藩は、ほかに和歌山藩・岡山藩がある。

宮津藩は、祭主開扉・進饌・読祝文・初献・巫献・終献・受福・閉扉の順に行われた。

(3) 祝文 祝文は文宣王をあげ、徳が世に満ち、また、学問の上達を願って奉ぜられたものであった。この祝文
 の基本形式は、まず祭奠の年号が唱えられ、つづいて祭主者名、奏上文が唱えられた。年号の言い方も「維年号何年
 歳次□□二月□□朔越□□□□」干支と言われていた。例えば「維天保八年歳次丁酉八月丙午朔越十二日丁巳」というよ

うにである。このような言い方が基本ではあるが、例外的には名古屋藩のように「慶応三年八月七日」といった言い
 方もあった。祭奠の儀式は古式が尊重され改められることはほとんどなかった。そういう意味では名古屋藩の場合、
 興味ある言い方といえる。

昌平饗の祝文は、延喜式にある祝文と全く同じであり、また、山口藩(毛利本藩)においても「謹以制幣饗齊」が
 「謹以制幣饗齊」に、「以先師顔子等配」が「以克国復聖公・邨国宗聖公・沂国述聖公・鄆国巫聖公配」といいかえ
 られただけであった。多くの藩が内容的には、昌平饗や山口藩とほぼ同様な祝文を奏している。

山口藩の家老宍戸氏の場合には、「冀永賜闔境安寧、士遊此校、才徳達成、文人濟々、維後維英、其職有績、各揚
 命名、武夫赴々、維鋭維精、其勇無前、永為千城、農服田畝、乃耘乃耕、百穀豊熟、稼如抵京、人々富昌、家々充盈
 長子養老、保亀鵬令」とも奉ぜられていた。即ち学校の隆盛のみではなく、家臣の文武の上達、百穀の豊熟を願ひ、
 士民の長寿を請願している。

三 おわりに

祭奠の祭礼は藩校の一大行事であった。ふつうの祭礼は、二月と八月の上丁または中丁の日に行われた。延喜式
 によると「若上丁当国忌及祈年祭、日蝕等、改用中丁、其諒闇之年、難從吉服享停」と記されている。毛利藩の場合
 祭奠の準備は十日前からおこなわれた。その様子を『日本教育史資料』によって記すと次の通りである。

祭日十日前 献官以下諸役人の人からも定人と被仰付候事、役人相極候上御膳夫頭供物其外入用の物相調用意仕
 候事

祭五日前 儀式役員御作事奉行御膳者頭下役人共に学館に会集し前用意被仰付候事 作事方破損の修理仮

屋の仕構掃除等の沙汰相成候事

祭四日前 御膳者頭齋盃齋の酒を沙汰するなり

祭三日前 献官以下当日出合の役人齋の事、諸役人学館に会集し儀式の前集し有之候事

祭前日 儀式役并御作事奉行廟司其外掃除の儀を沙汰し堂の内外掃除を致し堂の後に瘞坎用意仕候事 同日御前

夫頭罷出膳具の濯漑供物の料理等致沙汰候事

また、祭礼前から身を浄め清浄な心身となつて祭礼に臨むことが要求された。祭礼前三日より二日の間を散齋といひ、「火ヲ改メ心慎迄ニテ公私詣勤平日之通ニテ但シ改メテ早朝浴湯致シ身ニ清メ肌ツキ腰卷等迄相改忌服有之家工見舞ニ不罷越病家へモ立入間敷淫乱之類耳ヲ穢シ候事相慎ミ何ニヨラス不浄之儀ニ相預リ不申」様にしなければならなかつた。また、祭礼前一日を致齋といひ「精進齋相慎ミ御祭礼外ハ官ノ出仕ヲモ断申上麻上下著清浄之間ニ引籠リ婦人女子同間工不令立入飲食ノ品別火ヲ以煮焼致シ魚鳥酒茶烟草其外総テ臭氣有之品并ニ辛キ物不可用候看書臨書之外雑事ニ相預リ候儀一切無之身心共清浄」にして式に臨むこととされた。

国を治めるためには、「以造士為本、造士以学為本」ことこそ大切であり「而学之本在先聖先師」と孔子ならばその弟子達の教えに従ふこと。これこそ、人が育くまれ国が栄える基本であると考えられた。そのため学校の設立が望まれ、一つの頂点としての釈奠が営まれたのであつた。